



## 年間第 21 主日 (ルカ 13:22-30)

私の召命どこへ行くにも「片道切符」でした

イエスは一同に言われた。「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。」(13・23-24) イエスはご自分に従おうとする人々に覚悟を求めます。「狭い戸口から入るように努めなさい」という呼びかけが覚悟を求めるものであるなら、各自が自分に当てはめやすいたとえで、覚悟を問うようにすると今日の福音もより深く理解できるはずです。

ごく最近を含め、生涯記憶に残る忘れ物事件が三度あります。いちばん近いものから始めます。8月21日の田平町ナイターソフトで珍しく「ホームラン」と「二塁打」を打ちました。第一打席も出塁したので「ナイスバッティング」ならぬ「ナイスバット」だったわけです。本来ならこのまま鼻を高くして日曜日の説教の「小ネタ」にできるわけですが、その殊勲のバットを試合後にグラウンドに忘れてきてしまいました。

不安になり取りに帰ろうかと思ったのですが、すぐに戻れば「忘れ物」と気づかれます。それが嫌で、グラウンドに残っている人がいないか期待して、メンバーの一人に電話をかけました。この人もグラウンドをあとにしていたが取りに行ってくれました。愉快的話が水の泡です。

二つ目は、先週のリュックサック事件ですね。侍者を連れて天草の教会巡礼旅行に出かけた時のことです。車三台に分乗して、島原の口之津からフェリーで車を運び、天草の鬼池港に渡し、上陸後一時間走った場所に崎津教会があります。渡辺主任神父様の貴重なお話を聞き、信徒会館をお借りして昼食を取り、教会を背景に集合写真を撮りました。

帰りながら、岬に立つ聖母を眺め、大江教会では純心聖母会のシスターに教会の説明をしてもらい、最後に大江教会のふもとにある「ロザリオ館」という資料館を訪ねて鬼池港に戻りました。順調にきた旅行日程でしたが、一人が「リュックサックが見つからない」と言い出すのです。目の前のフェリーに乗り込もうという時に忘れ物です。話の流れでお気づきかと思いますが、リュックを忘れたのは子供ではなく、中田神父であります。

ロザリオ館の職員に電話してみますが「見つからない」との返事。大江教会のシスターに連絡するも「ないですね～」と力ない返事。シスターは自分のことのように心配してくれて崎津教会にも電話連絡。「崎津にもありませんでした。」15人の巡礼グループのうち13人はフェリーに乗せ、あきらめが付くまでと中田神父と同伴の典礼委員長で来た道を引き返しました。

そこへシスターから電話。「崎津では集合写真か何か撮りましたか？ 玄関先に無造作に置いてあったそうです。今は預かって、ロザリオ館の前でお渡しできます。」これからはシスター方と天草に足を向けて寝ることはできなくなりました。

最後は、大学生時代。慶応大学の通信の学生だったので、夏のスク

ーリングで神学校が提携している「トマス寮」に下宿していました。その年のスクーリングも無事に終了。大きな荷物は宅急便で先に五島に送って手ぶらで仲間の神学生と新宿駅に向かいました。何とそこで私が長崎までの特急券と乗車券がないと言いだしたのです。

隅から隅まで身体を探りましたがありません。結局、同僚にもお金を協力してもらい、再度購入する羽目に。実家に帰り、恐る恐る宅急便の箱を開けると、そこにJRの切符が入っていました。この片道切符は今も記念に残っています。

つねに私の旅行は「片道切符」でした。召命の道も、片道切符でした。前もって往復を用意していても、「復路」は何も分からない旅でした。忘れ物事件もそのことを痛いほど教えてくれています。「つねに片道切符だと思って目の前のことに集中しなさい。」そういう注意を与えてくれました。

神学校時代、何度も五島から長崎行きの二等フェリー切符を買いました。片道切符でした。大神学校に行くとき、長崎博多間の片道切符を買いました。初めて赴任した浦上教会、その後転任していった教会、現在の田平教会。すべて、後戻りのできない「片道切符」で赴任しました。どんなに過去が懐かしくても振り返らず、片道切符を握りしめて、行った先で結果を出す。それが私の召命の道でした。

すべての人に召命の道があります。後戻りを考えてしまうと、召命は完成しません。つねに片道切符のつもりで、励む。これが、中田神父が考える「狭い戸口から入る」覚悟です。

あなたはイエスに従っていく覚悟を、どのようにたとえるでしょうか。人に話して聞かせることができるくらいに要領よくまとめると、それはあなたの宣教の道具になります。